

06.6.19.
流域委員会資料

意見書

3年間の武庫川流域委員会は何だったの
だろうか！

委員 法西 浩

委員全員（何とも思わぬ委員もあろうが）は、
新聞の報道で知った、県知事の態度に対して、
暗澹たる気持ちに襲われた。私としては、今ま
で一体何をしてきたというのだろうか。

参画と共同、治水・利水・環境がキーワー
ドであり、未来に向けたパラダイムだったの
ではないだろうか。

もう一度、総合治水とは何かを、じっくり
と考えよう。私から次の資料をお届けする。

●大日向美那子（2001）「武庫川ダム問題」
の近況と総合治水、兵庫の自然・環境と生
物の現林— 兵庫県生物学会創立55周年記念
誌 兵庫県生物学会 発見（別紙に）

●今本博健（2006）川づくりと暮らし、朝日
新聞 2006.6.6.（別紙に）

●国交省（2006）洪水危険度平易に、神戸新
聞 2006.6.9.（別紙に）

06.6.19.
流域委員会資料

朝日新聞 2006.6.6.

神戸新聞 06.6.9.

国土交通省は8日、大雨で増水した河川の水位を表す用語を、住民が避難の判断をしやすきよう分かりやすく言い換える案をまとめた。住民の迅速な避難につなげて被害を軽減するのが目的だ。

洪水危険度平易に

「通報水位」を「水防団待機水位」に、水防団が出勤し町村が住民に注意を呼びかけ

「警戒水位」→「はんらん注意水位」

今年からいくつかの河川で「警戒水位」を「はんらん 険水位」に、それぞれ改める。現在は白地に黒の目盛りの水モラル的に実施し、将来的に「注意水位」に、避難勧告の目 位計に、各レベルに相当するは洪水被害の恐れがある全国 安となる「特別警戒水位」を危険度の表現としてレベル 位置を黄色も赤に色分けして千二百の河川で導入する。「避難判断水位」に、避難が 1から4まで設定、実際には 示し、危険度がすぐ分かるよ具体的には水位が上昇する 完了していることが望ましい はんらんすればとする。 うにもする。 順に、水防団が準備を始める 「危険水位」を「はんらん危 橋脚などに設置してある、

国交省 住民の迅速な避難狙い

梅雨期を迎え、集中豪雨など水の被害が気になる。安全性と自然環境を守るためにとらするが、河川工学の専門家で、行く川の流れを長くみつめてきた今本博健・京都大名誉教授の提言を――。



いまもと・ひろたけ 37年生まれ。01年から淀川水系流域委員会委員を務め、ことし2月、委員長に。

いまわが国の川づくりは行き詰まっている。これまでの川づくりによって治水と利水の安全度は高くなった。だが、洪水や濁水の被害を完全に防ぐことは不可能であり、コンクリート護岸や河道の直線化が生物の生態地を奪い、ダムは周辺や下流の自然環境を破壊した。これは河道改修とダム建設を両輪とする川づくりがもはや適用しないことを意味している。これ以上のダム建設を

川づくりと暮らし

やめ、河川の環境を破壊することなく、治水・利水を図るにはどうすればいいか。河川技術者だけでなく多分野の専門家と市民が一緒になって議論する時期にきたと考える。まず、治水については、現在の河川が流しうる能力を確保するためには、堤防補強が不可欠である。現在の土まなほ砂でできた堤防は、水の浸透や侵食によっても破壊される。堤防の中心部に鋼矢板やソイルセメントの壁を設置

京都大名誉教授 今本 博健さん

すれば破壊を防ぐことができると思われる。これは海外でも実施されている工法で、十分に効果をあげている。また、水害がおきた時の対応を考えておくことも重要である。自治体は土石流が起こる可能性がある地域には住宅を建てないよう規制し、浸水する恐れがある地域の住宅は高床式にして、まちを耐水化する必要がある。昔ながらの住宅地をみると、川から少し離れた小高いところに建てられ、地盤の低いところでは高床式の家が見られる。

私は刈谷田川(新潟県)、由良川(京都府)、円山川(兵庫県)など各地の水害被災地を調査し、避難勧告の出るのタイミング、「人権的」のお年寄りが避難できずに犠牲になったりした例をみた。地震の避難場所ならグラウンドでもいいが、水害では頑丈な階建て以上の建物がいい。いすれにしても地域の連携が大切であり、住民も水害について生活の知恵を働かせることが大事だろう。利水の面でも発想の転換が求められる。水資源の開発を続けられ、川の水は枯渇し、河川環境はためになる。節水などで水需要を抑制し、新たな水資源の開発は行わないようにする必要がある。

97年に河川法が改正され、河川環境の保全と整備が法の目的に加わった。人口が減少に転じ、土地の利用形態も変わる今、新たな川づくりに挑戦する絶好の機会である。(寄稿)

視点

関西スクエアから

治水・利水発想の転換を

「朝日21関西スクエア」は、関西からのメッセージ発信を目指し、各界で活躍する方々の参加を得て98年に発足しました。当欄で会員の方々へのインタビューや寄稿を紹介しします。ご意見は事務局(square.k@asahi.com)まで。

提供 頼 法西港

